

招待席

尾崎 紅葉

おざき こうよう 小説家 小説家 1867.12.16(陽暦
1868.1.10) - 1903.10.30 江戸芝中門前町に生まれる。
我楽多文庫から硯友社にいたる文学運動を主導、泉鏡花を
はじめ俊秀を育て、文学の根幹である文章に彫心鏤骨の才
を注ぎ込んで、三十六歳、若くして病魔に斃れた。近代文
学筆頭の大作者であった。掲載作は、表題の示す通りで
ある。愛と慧眼に胸打たれる、

門弟泉鏡花を励ます書簡

「夜明まで」は「鐘聲夜半録」と題し例の春松堂より借金の責塞(せめふさぎ)に明日可差遣(さしつかはすべき)心得にて 此二三日に通編刪潤(さくじゆん)いたし申候 巻中「豊嶋」の感情を見るに常人の心にあらず 一種死を喜ぶ精神病者の如し かゝる人物を點出するは畢竟作者の感情の然らしむる所ならむと私(ひそか)に考へ居(をり)候ひしに 果然今日の書状を見れば作者の不勇氣なる 貧囊(ひんる)の爲に攪亂されたる心麻の如く 生の困難にして死の愉快なるを知りなどゝ 浪(ミダ)りに百間堀裏の鬼たらむを冀(こひねが)ふ其の膽の小なる芥子の如く 其心の弱きこと芋殻(おがら)の如し。さほどに貧囊が苦(くるし)くは安(なん)ぞ其始(そのはじめに)彫閨錦帳の中に生れ来らざりし。破壁斷軒の下に生を享けてパンを咬み水を飲む身も天ならずや。其天を樂め!

苟(いやしく)も大詩人たるものはその「脳」金剛石の如く、火に焼けず、水に溺れず 刃も入る能はず、槌も撃つべからざるなり、何ぞ況(いはん)や一飯の飢(うゑ)をや。

汝が金剛石の脳未だ光を放つの時到らざるが故に 天汝に苦楚の沙と艱難の砥とを與へて汝を磨き汝を琢くこと數年にして 光明千萬丈赫々として不滅を照らさしめむが爲也 汝の愚癡(ぐち)なる箇(か) 寶を抱くことを曉らず 自(みづから)悲み自(みづから)棄てゝ 隣人の瓦を撃(あ)ぐる見て羨む志、卞和(べんな)にして楚王を兼ねるものといふべし。

汝の脳は金剛石なり。金剛石は天下の至寶なり。汝は天下の至寶を藏(おさ)

むるものなり。天下の至寶を藏むるもの 是豈(これにあに)天下の大富人ならずや。

於戲(あゝ)天下の大富人 汝(なんぢ) 何ぞ不老不死の藥を求めて其壽を延べ其樂を窮めざる？！

貧民俱樂部はまだ手を着けず。少年ものは賣口(うれくち)あり。十分推敲しておくべし。

近來は費用つゝきて小生も困難なれど 別紙爲替(かわせ)の通り金三圓だけ貸すべし

倦(うま)ず撓(たゆ)まず勉強して早く一人前になるやう心懸くべし

明治二十七年

五月九日

紅葉

鏡花 君